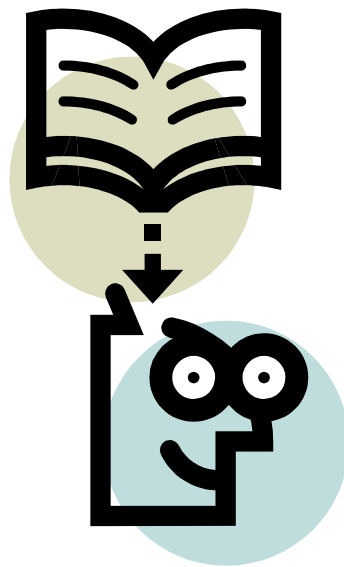


が苦心がんばれ（１）

研究計画をどう書くか

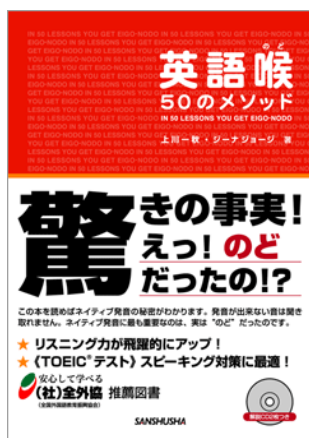


VERSION 19

UPDATED

2/24/2008

Kazuaki Uekawa, Ph.D.



著者の自己紹介

広島県安芸津町出身。同志社大学英文科卒業（1992年）2000年、シカゴ大学にて博士号を取得（社会学）。南フロリダ大学ポスドク、が苦心特別研究員を経て、AIR（ワシントン DC）リサーチアナリストを経て、現在は、OPTIMAL SOLUTIONS GROUP シニアリサーチアソシエート。教育改革の評価研究が主な仕事。

社会科学リサーチが社会に与えるインパクトが少ないが、いつかなんらかの貢献したい、、、とっていたところ、英語ネイティブと同じ英語発音が正しくできる方法を、共著者とともに発見、発明した。科学革命（トーマスクーンの的な意味で）だと信じている。特許を自力で出願（勉強になった）。米国 PROVISIONAL 申請（2005）、国際申請 PCT（2006）をへて、現在（2008）、日本国内段階へと以降。

英語喉 50のメソッド 三修社さんより、全国書店にて、好評発売中。詳しくは www.eigonodo.com（出版社さんサイト）

www.nippondream.com（著者サイト）

www.estat.us/wordpress（著者ぶろぐ）

本書で紹介したネイティブメソッドを、が苦心で研究してくれる人が出てくれるのを待っているところ。

連絡先

question@estat.us

目次

I.	研究計画提出までの道のり	4
	第一段階 勉強モード	4
	第二段階 テーマの選択.....	4
	第三段階 テーマをもっと絞る。	6
	文献を検索	8
	文献研究にも2種類ある「とにかく全部読む」と、「理論的なアプローチ」アプローチがある。	8
II.	研究テーマから、独自の理論を構築する	10
III.	学振 特別研究員 研究計画ガイド	13
	分かる研究計画を書く。	13
	こういう読み手を想定する	13
IV.	申請書の書き方	14
	現在までの研究状況とこれからの研究計画の二つを書かないといけない。	14
	現在までの研究状況.....	14
	これからの研究計画.....	14
	研究の背景.....	14
	研究目的、内容の書き方.....	16
	研究の特色、独創的な点.....	22
	年次計画.....	24
	自己評価.....	24
	天下の宝刀 PAR メソッド	27
V.	チェックリスト 書き上げた後で.....	29
VI.	再考 研究の背景及び国内外の研究状況.....	34
VII.	再考 貢献の仕方 いろいろなパターン	36
VIII.	チェックリスト	39

1. 研究計画提出までの道のり

大学院応募、修士論文、博士論文、が苦心研究計画、どれをとっても研究計画を準備するためのプロセスは同一である。

第1段階 勉強モード

- ・ まずはその分野を勉強する。コースワーク、教師、学友との議論、多読を通じて、各分野の重要なテーマに触れる。大学院の一年めにこういうことをすべきだろう。¹

第2段階 テーマの選択

- ・ テーマを決める。例えば「私は教育機会の不平等について研究します。」と言えるようになる。

でもどうやってテーマを決める？ある一つのことを考えてほしい。なずけて、愛国的、あるいは世界愛的テーマ選択法。人として生まれてきた自分が日本社会に（あるいは世界）に貢献できることはできないだろうか、、、。なんらかの形で人々の生活をよくすることはできないだろうか、、、と。

医学であれば簡単だ。病気を防ぐ、治すためためには、病気の原因を解明しなければならない。何をやっても愛国的、あるいは全人類的爱の追及である。科学であれば、どんなメカニズムを解明するにしろ、きっと応用があり、それが人々の生活に役立つはずだ。自分は、A I D S の治療法を解明したい、、、そうすることで世界に貢献したい、、、となる。

社会科学であれば、困難な社会的な社会的な状態を改善するためには、社会のメカニズム（例 貧困はなぜ維持されるか）などを解明していくことで、政策的に貢献することができる。一方、歴史、人文系はどうだろう。歴史を解明することは、日本人自身のアイデンティティを知ること役立つ。なぜ日本は戦争が始めたのか、、、というようなおおきなテーマなど、本当に、役に立つテーマだ。人が知らなかったような資料によって、日本人が本当に日本の歴史を理解

¹体験談メモ：議論をする、、、と書いたが、これは、やはり自分のやっている研究に関して、堂々と喋れなければ、話にならない、、、という要素がある。アメリカの私の業界でも、やはりがんがんそのトピックに関して人前で喋れる、、、というのは大切で、昇進にもかかわる問題だ。ただ単に喋るだけでなく、**聞いている相手に合わせてコミュニケーションのしかたを変える**、、、というレベルまで、大学院の時期に達しておきたい。抽象的な議論の好きな人には、抽象的なことをぶつけるが、事実が好きな人には、事実でせまる。社交的な相手に対しては、少しぐらいはパーソナルなことを混ぜながら、話すとか。誰に対してでも、同じスタイルで迫るのは、ダメのようです。面接などに行って、抽象的なことが好きな面接官に、細かいことを言ってもダメ。大学院時代に相手の性格、コミュニケーションスタイルなどを見抜いて、それに自分を合わせる形で、学術的な議論ができるようなレベルまで持っていくと、将来役に立つ。

するならば、そこには、本当に大切な人文学的な価値がある。文学だってそうだ。日本人が日本人のアイデンティティを知ることになる。アイデンティティを探る、、、とは非常に壮大なテーマだし、なんのこともやら分かん感じがするが、社会において、誰かが、その国の歴史を伝えていかなければならないし、誰かが、日本文学の面白さを伝えていかなければならない。²

医学であれば、正当化は簡単だが、文系になればなるほど、いいかたが大変になることは確かだが、それは文系の宿命であるし、使命でもある。なぜ日本人が自国の歴史を知ることが大切なの？という子供の問うような質問に答えられなければならない。

大変なのは、日本と全く関係のない分野を先行している場合だ。例えば、マヤ文明のXXXを研究します、、、と言った場合、どうしたものだろう。これは私には分からない。世界固有の文化、文明を理解することは、人類のアイデンティティを理解することにつながる、、、とかそういうことだろうか。とにかく自分の言葉で語れるように。³

・ テーマに重要と思われるサブテーマを5つほど考える。そして、そのサブテーマごとに重要な文献を10から20集める。合計100ほどの論文を集めることになる。これの論文を熟読する。

サブテーマのカテゴリーの例であるが、あるテーマに対して、、、

- ・ 一般的入門的文献（レビュー論文を含む）
- ・ 歴史的アプローチ
- ・ 心理学的アプローチ
- ・ 経済学的アプローチ

といったテーマごとに、文献リストをつくる。文献リストは、読んだ論文や博士論文に載っていたものを手がかりにしてもいいし、キーワードで検索してもよい。私の分野（教育社会学）では、すでに大きなリストが、学会でまとめられている。

http://www.asanet.org/soe/pub_bibliography.html

² 「役に立たない」ように見える研究も大切だ、、、という言い方はよく聞く。が、本当に「役に立たないような研究」を支えるような研究機関、大学機関が10年後に存在するか、、、というところまで、若手としては見極める必要がある。その分野自体が10年後に存在するか、、、というところまで考えるべきである。

³ 体験談 私自身は、大学時代、英文学を4年間やったが、卒業前に「英文学とはこうこうこういう研究分野で、こういう意義がある」ということを言えなかった。そういう場合は、できるだけ早いうちに見切りをつけるのがよいと今となっては思う。そもそも、高校時代の受験前に決定した専攻なので、「自分で選んだんでしょ」とかすごまれても困る。日本の教育制度は、途中で進路を変えにくいから**非常に困る**。進路を変えにくい=本当に得意なことをしていない人がおおいかも=国家の人的資本が伸びにくい、、、。

こうしたリソースを駆使して、ビブリオグラフィーをつくりあげる。具体例は私自身のものを私のHPに載せて置いたので、参照されたい。テーマは社会階層論である。

www.estat.us/biblio_sample.pdf

こうして作り上げたビブリオグラフィーは同じ興味を持ったもの同志のあいだで大いに交換しあって、議論する。

もちろんここで、指導教授にも相談することになる。自分自身の教官でもよいし、あるいは、他大学の研究者でもよいだろう。初めて相談に行く場合、「ビブリオグラフィー」に関して相談したい、と、たとえば、とてもよい理由になるだろう。特に大学院の最初のころは、教官に何を聞いたらいいのかわからないが、なんらかの話をしたい、、、と思うものだ。だから、こんなメールを書いて、相談にいくとよいだろう。

鈴木先生

突然メールいたします。私は馬鹿田大学大学院1年生の田中と申します。ばかぼん教授のもとで、「広島のお好み焼きが大阪のお好み焼きよりもおいしいのはなぜか?」というテーマで研究をしています。本当に「おいしい」のではなく、広島県民が、「そうに違いない」と勘違いしているのではないか」という仮説を追及しています。まだまだ研究の諸段階なので、まずは、この分野を広く読むことから始めようと考えておりますが、この分野にお詳しい鈴木先生にご指導をいただけないかと思っています。まずは、自分なりに文献リストをつくってみました(添付)。この文献リストについて、ご意見をいただくために、先生のオフィスアワーを訪れてもよいでしょうか。ご都合のほうをお知らせください。

第3段階 テーマをもっと絞る。

定めたテーマのなかから、もう少しフォーカスしたテーマを絞る。そのことについて、**あらゆる学者が徒党を組んでいそうなことを言っているような論点**を選ぶ。いわゆるホットなテーマがよい。⁴

例えばテーマが「ギョウサ」だったら、絞ったテーマは「日本のギョウサがおいしいか、中国のがおいしいか」というかんじだ。日本のギョウサがおいしいといっている学者の論文と、そうでないと言っている学者の論文を読み、論点を整理したり、方法論を比べたりする。もう一つの例をあげると、教育社会学という分野において、教育機会の平等というのがひろいテーマだったとしたら、絞ったテーマは、例えば、「生徒の能力別クラス分けは教育の不平等度にどう関係するか、、、」となる。

⁴ 何がホットで、何がそうでないか、わからんような分野もある。困る。

この段階は結構重要だ。この点ができていないと、将来書き上げる論文の先行研究の部分がうまくできないことになる。先行研究が書きづらい理由は、実は自分の分析にそれほど関係のない文献をながったらしく議論してしまうことにある。せっかく読んだので、論文で言いたいことは確かなのだが、関係がありそうで、それほど論文のコアの議論に関係のない文献を挙げすぎてしまうと、論文の前半部が長くなりすぎてしまう。

文献研究などで、話がやたら大きくなってしまわないようにしなければならない。例えば、社会学でいえば、あたかもマルクスとかヴェーバーを切ってすてる、、、ような調子で語っても、それは無理なことだ。そういう大きなことじゃなくて、学会内で言われている小さな、フォーカスされたテーマを選び、そのテーマに関する文献を丁寧にあたるのが大切である。

私自身、博士論文で、マルクスがどうの、デュルケームがどうの、というようなことを文献研究で書いて、あたかも、彼らを覆すような筆の運びかたをしたものの、結局のところは、経験研究というのは、そのような大掛かりな「一本ぜおい」のようなリサーチは難しい。それよりも、学会で焦点になっているような点にフォーカスする。

私は博士論文において、35カ国の中等教育を比べた。中学生の数学のテストスコアがあったので、親の教育レベルによる得点差を従属変数とし、どのような制度をもった国家においてこの得点差が多いのかを調べた。この得点差が大きければおおきいほど、その国は教育機会的に不平等であると定義した。

マルクス的な説明、デュルケームな説明というふうに社会学の古典的な社会階層理論を文献研究の一部で議論したものの、論文にする段階で、スタンフォード大学のえらい先生に読んでもらった、「経験研究なんだから、あまりにマクロ的な議論をせずに、目の前のフォーカスしている課題に密接に関係のある文献から、もっと「さくっと」議論にはいりなさい、、、と助言を受けた。まったく、そのとおりである。この「さくっと」が難しいのは、文献研究のフォーカスが定まっていないからである。書き出しが、ながながとなってしまう、数ページまで何の研究か分からないということを誰でも経験するはずだ。それはテーマ選びのさいのフォーカスが広すぎるのだ。

ある意味で、リサーチの全体のプロセスにおいて、この部分はとても重要である。なぜなら、この部分が、ある研究が学会に対してどのような貢献をするか決定するからである。こういう先行研究があって、こういう議論がおこっていて、自分はそれをこのような形で料理する、、、というようなことを決定するのは、テーマを絞る時点にでてくるように思う。

文献を検索

米国においては、文献はかなりの量がすでにデジタル化されており、文献研究がしやすくなっている。最近（2004）は、雑誌類であれば、ほとんど WEB 上で入手可能である。ちなみに、社会科学系だと、www.jstor.org が有名であり、米国の大学では大学レベルで SUBSCRIBE しているので、学生は無料で、アクセスすることができる。また、人文系哲学系だと、Past masters が有名である。www.nlx.com がそのリンクである（シカゴ大学の人文系の大学院生は、ネットでネーチェやデカルトなどの哲学書を読んでいた。）

文献研究にも2種類ある「とにかく全部読む」と、「理論的なアプローチ」アプローチがある。

とにかく全部読むアプローチは、医学とかで、教育研究とかで結果がはっきりしている場合。メタアナリシス的なものである。例えばある薬が効くかどうか。ある薬に関する研究論文を全部読む。特定の教育カリキュラムは実際に生徒の学力をあげるのかどうか。このトピックにフォーカスした論文をとにかくピックアップし、全部読む。以下にその方法をまとめるが、これは私自身が仕事で経験したことだ。

<http://ies.ed.gov/ncee/edlabs/projects/project.asp?id=70> はその結果となるレポートだが、このプロジェクトで行ったことをまとめてみる。

1. テーマ 教師の教育研修が生徒の学力に好影響を与えるかどうか。
2. このテーマについて書かれた論文、レポート、博士論文をピックアップ（年代の枠を定めて、そこから全てを選ぶ）
3. 全てを読む前にどういう基準で読むか（コーディング＝評価をするか）を決定する。いくつかを紹介する。
 - a. メソッド（何が用いられたか、正しい手続きによるものか、信用できるか）
 - b. 被験者（誰か、人数）
 - c. 結果（結果として、効果はあったか）
4. ひとつひとつの論文を読み、上の項目にもとづいてコーディング・評価をする。コーディングというのは、上の項目に関して yes や no で答えたり、人数をメモしたりということだ。エクセルで表をつくっておいて、各論文ごとの評価を記入する。

以上のようなプロセスを経て、ある一つのテーマに関する全ての論文を読み、すべての論文を評価したこととなる。このプロセスから学べるのが、次の（自分自身の）論文のテーマになるのだ。例えば、多くの研究が、正しいメソッドを使っていなかったということが判明するならば、「私自身が正しいメソッドを使って、同じ仮説をテストしてみます」となる。多くの研究が、なぜか小、中学高の先生と生徒しか研究対象にしていなかったとすれば、「私は高校レベル、大学レベルでやってみます」と言うことができる。

理論的なアプローチ

なんでも読むアプローチというのは、ある意味で、非理論的で、早い話が、「ある薬に効果があったかどうか」「ある教育カリキュラムに効果があったか」という感じで、結果のみが關心になりがちだ。理論的なアプローチというのは、もっと深いアプローチで、「なぜ、そうなるの？」を真剣に問っている論文を主に読み、理論的な議論をまとめるものである。だから、なんでもかんでも読めばよいということではない。その分野において大切な理論を提供してくれているものを読むことになる。

例えば、なぜアフリカでエイズが猛威を振るっているのか、、、に関しての理論を整理しながら読むのである。

理論 1 文化的な要素がある。

理論 2 経済的な要素がある。

理論 3 歴史的な要素がある。

そして、それぞれの理論に関して、さらに理論を整理してみる。

理論 1A

理論 1B

理論 1C

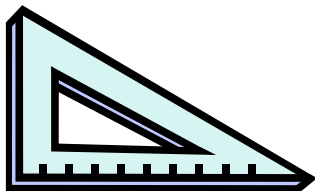
そして、それぞれの理論の良い点、悪い点などを比べてみる。

具体的には、「本研究計画では、理論 1A による仮説と理論 1B による仮説を比べて、どっちが真実をよりよく説明しているかを評価します」、、、、という感じに持っていけるようにする。

II. 研究テーマから、独自の理論を構築する

名づけて三角作戦

どのようにすればオリジナルな理論を構築できるのか？まず、理論とは何かである。いろいろあるが、大学院における研究計画においては、とりあえず理論とは、現象の間の関係を説明するものとする。



現象の間の関係とは何か？例えば、野菜を食べることと、癌になりにくいこと。テレビを見過ぎることと、数学力の低下、ある社会階級に生まれることと、政治運動にかかわるかどうかの関係、地球温暖化と、台風の関係。

一方が原因であり、一方が結果であるということが出来るかもしれないが、実はそうではない。原因と呼ぶよりきっかけとでも呼んだ方がよい。「野菜を食べる」ことは、厳密に言えば癌にならない原因というよりは、きっかけである。本当の原因は、野菜が体に引き起こす何かである。テレビの見すぎは、厳密には数学力の低下の原因ではない。きっかけである。本当の原因はテレビをみることで、視力が弱くなり、本が読めなくなるとか、テレビを見ることで、時間がなくなり、従って勉強時間が減るといったことが原因である。

ここで、言葉をまとめることにする。三つの言葉を使おう。

- 原因もどき (=きっかけ)
- 本当の原因
- 結果

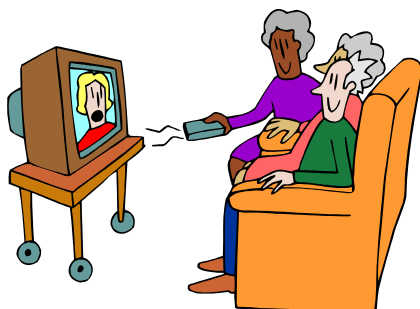
そして、これらのタームを、三角形のそれぞれの角にあてはめて考えてみてほしい。「原因もどき」が頂点の角だ。それから右に伸びる辺がたどりつく角を「結果」とする。この時点では、三角形ではなく、一つの線である。この線を書くことをテーマの選択と呼ぶ。上で挙げた例でいくと、まず、「野菜を食べること」と「癌になること」の関係を研究するぞ、あるいは「ある階級に生まれること」と「政治運動に関わること」の関係を研究するぞということを決定する。これがテーマの選択である。

テーマは、重要なものでなければならない。特に、社会的な価値、実際的な価値がいる。研究

計画は、たいてい国民の税金を使わせてくださいと懇願するためのものだから、結局は役にたたないと意味がない。(理論と実益がなぜ結びつかねばならぬかは、税金を使うというだけの理由ではない。理論的に豊かな研究は、必然的に実益をともなう。この「仮説」の論証には少し時間がかかるので、後日執筆することにする。)

次に理論である。理論構築とは、上で描いた直線に、2本の線を加えることによって、三角形を完成させることである。「原因もどき」が三角形の頂上の角であるから、それから左に下る辺の先に「本当の原因」がくる。そして、その「本当の原因」から、今度は右に水平に伸びる線を、かき、右にある「結果」の角に到達させれば、3角形が完成する。

まずは、とにかく思い付くだけの3角形を書いてみる。100個は書きたい。本は捨て、ただ鉛筆と紙だけもって、お気に入りの喫茶店でコーヒーでも飲みながら思索にふけるのがよい。(本は、この思索の場にはもちこまない。誰がこういった、ああいったというのは先行研究を考えるにはいいが、独自の理論完成には邪魔となる可能性がある。)



- テレビの見過ぎ --->時間がなくなる--->勉強できない
- テレビの見過ぎ --->目が悪くなる--->勉強できない
- テレビの見過ぎ --->次の日眠い--->勉強できない
- テレビの見過ぎ --->反抗的態度をドラマなどで学ぶ--->勉強できない
- テレビの見過ぎ --->電波が脳に悪影響を与える--->勉強できない

さて、100個ぐらいこの三角関係を集めた後はこれらを次の三つのグループに分ける。

- すでに言われていること。
- あまり言われていないが、データ取得不可能、検証不可能。
- あまり言われていないが、データ取得おおいに可能。検証も可能。

この最後のグループに属する三角群こそが、君の発見したオリジナルなアイデアである。

ただ、どんなに奇抜と思われても、この世の中には新しいアイデアというのはめったにない。きっと似たようなアプローチを誰かが用いているはずだ。落胆することはない。それらの論文

を探して、君のアイデアをサポートする文献として利用しよう。

そもそも科学とは同じアイデアで同じ実験してもよいのだ。REPLICATION と英語で言うが、科学者が発見した結果は、誰がやっても同じでないと科学的発見とは言えない。

III. 学振 特別研究員 研究計画ガイド

分かる研究計画を書く。

どうすれば分かりやすくなるかは、読み手の立場にたって考える。書き手の立場ではなくて読み手の立場である。このためには「読者」がどのように読むかを考える。当たり前のことではない。読む立場から書くことを考える、、、ということはとても革命的なことなのだ。

例えば、読者は一体、筆者が今から何を述べるのかを知らない。多くの書き手はこの根本的な事実を無視する。

幸い、学問の世界には長年にわたって確立された形式がある。研究計画の最初にはイントロがきて、それから先行研究がかかっていることは誰もが知っている。いわば学問の世界の文化的遺産とでも呼ぶことのできる形式についてここで学ぶ。

こういう読み手を想定する

読者は、筆者の文章を読むより、他にしたいことがあると想定する。何枚もの研究計画を呼んでいて疲労ぎみの読者を想定する。そんな読者の気を引き付けるような研究計画を書かねばならない。下手をすると、研究計画のイントロと結論だけ読んで、あとは流し読みとなるかもしれない。

これをさけるには、、、読者に少しでも「あれ、これどういう意味だ?」と思わせてはならない。読者が、文章の意味に関して考え込まなければわからない瞬間があまりに多いと、読者は苦痛を感じはじめる。苦痛が多いと、研究計画の「内容」に関して考えてもらえなくなる。

もう一つの読者像。読者が何も知らないと想定して書くほうがよい。目新しいことではないが、研究計画を審査する人たちの、専門はいろいろだ。その人たち全員に分かるように書かねばならない。

IV. 申請書の書き方

現在までの研究状況とこれからの研究計画の二つを書かないといけない。

現在までの研究状況

これからの研究計画と同じような要領で書くとよい。本書では、これからの研究計画の書き方のほうを詳細にする。これまでの研究と、これからの研究の内容の違う人は、心配が大きいかもしれない。が、あまり心配しないように。過去の研究で見に付けたスキルなどが、実は全く違うように思われる研究に役立つということを、最後の段落に書くとよい。以下のような具合である。

- これまでの研究とこれからの研究がどのように違うか。
- これまでの研究で得たことが、これからの研究にどのように好影響を与えるか。
- すでに起こっている具体的な好影響。研究上 XXX という問題があった。この分野においては大きな問題である。ところが私は、私の元々の分野では当然とされている XXXX のメソッドを、応用することで、この問題を解決した。

最後の部分だが、この筆の進め方を PAR という。P は PROBLEM (問題), A は ACTION (行動), R は RESULT (結果) だ。これは自分の長所をアピールするときのメソッドだ。私はリーダーシップに長けています、、、というだけでは、説得力がないので、P、A、R の順番で説明する、、、このことを PAR と呼ぶ。ある日、こんな問題が生じました (PROBLEM)。私はこんな対処をしました (ACTION)。するとこんな良い結果が生じました (RESULT)。面接のときにも応用できる。

これからの研究計画

研究の背景

このセクションの目的は、1) あなたの分野でこれまで蓄積されてきた文献と、2) あなた自身の研究の関係をはっきりさせることにある。学術の世界においては、勝手に新しいことを言うことができない。これまで言われてきたことを踏まえて、発言しないと、無視されてしまう。また、あなたの論文は、すでにあった知識をどのように発展させるか、、、というのをまずは宣言しなければならない。

ものすごいことを宣言する必要はない。すでにある文献をちょこっと発展させるだけでよい。(ものすごい研究をしているのなら、研究計画よりも先に、特許申請のことを心配したほうがよいのではないだろうか。簡単なのは米国で仮申請してしまうことだ。)

研究の背景が事実上のイントロとなる。一遍に何本もの研究計画を読まなければならない審査員は、イントロを読むことによって、その後の文章を真剣に読むかを決定する。ここ

では、イントロ構成の一つの例を紹介する。名づけて心理作戦イントロ。このイントロは4つの部分からなり、それぞれの部分が読者の心理に働きかけるように構成する

ステップ1．テーマに選んだ現象がいかにか、人々や社会を苦しめているかを述べる。（これによって、着想にいたった経緯を語る。）

ステップ2．分野においてすでに確立されている説を紹介。（これによって「研究計画の背景」を述べることになる。）

ステップ3．読者に不安定感を与える。（問題点と解決すべき点を示唆することになる。）

なぜ、その従来理論では駄目かを幾つか述べる。

なぜ、その従来理論をそのまま放置しておく、どんな悪害があるか述べる。

ステップ4．最後に、この研究計画のなかで何をどのような手順で述べ、何を明らかにすることで、上で述べた説を改良するのかを約束する。（解決すべき点を具体的にどうやって、解決するのかを述べることになる。）

ここで、一つ一つのステップを詳しく説明してみる。

ステップ1 テーマに選んだ現象がいかにか、人々や社会を苦しめているかを述べる。

医学系であれば、とても簡単だ。「日本において癌は XXX 人の命を奪う、、、にも関わらず、まだまだ癌発生のメカニズムは発見されていない」という具合だ。社会問題を扱う社会科学系でも簡単であろう。「いじめは深刻な問題である。統計によると、、、」

人文系などでは、いかにか、あることの理解を深めると国民がそのことをよりよく理解できるか、、、というような感じで書くと良いかもしれない。

言い換えれば、このセクションはいかにかあなたの研究が「大きなインパクト」を持つかをアピールするのである。そして、いかにかあなたの研究が多くの日本国民を助けるかをアピールするのだ。これを「着想にいたった経緯」として語ると良い。

ステップ2

さて、上で紹介した現象をどのように料理するのか。この紹介によって、まず読者に方向性を与える。「この研究計画ではXXをXXの観点から、XXX説明する。」とかなんとかいう感じ。2、3行。読者は心理的に、ここで安定感を得る。歌のイントロと同じだ。どんな拍子でどんな感じの歌になるかという情報を与えるという点で、歌のイントロと研究計画のイントロは似ている。

ステップ3

次に、読者に動揺、不安定感、危機感を与える。分野においてすでに言われていることを述べ

るわけだが、その際にはっきりとは言わないが、これから批判しますよというトーンで書く。
「この分野において、XXXということが言われている。」

この直後に、読者になぜその理論ではだめかを、通告するのだが、前の部分で、なんとなく雲行きが怪しいと思っていた読者は、ここで「来たな」と納得する。（この部分で、読者は「私の直感も捨てたものじゃないな」と感じ、その充実感が、次の文章を読むパワーに繋がる？）

さらに、なぜその理論のままだと、だめなのか、悪害があるのかを述べる。ここで、読者に伝えるのは、絶対の絶対の絶対に、従来理論に甘んじていては実害があるということ。ここで、読者は恐怖のどん底に突き落とされ、君の理論なしには、君の分野の未来はないと感じる。

ステップ4

さて、イントロの最後だ。筆者自身が今から何を、どの順番で話すのかを述べる。約束の時間である。「以下において、XXXをXXXの方向から考えることによって、XXXを明らかにする。」そしてアウトラインを簡単に述べる。最後に、簡単に、この研究の理論的、実際的な貢献を短く説明する。ここで、読者は、希望を与えられたようだけでなく、研究計画の目的を確実に理解する。

研究目的、内容の書き方

これは6つの部分からなる。

- ごく手短に、直前にのべた研究目的に触れる。
- 先行研究（またの名を FRAMING）
- オリジナルな理論
- 仮説
- 準備分析
- 結論

分野によっては、この形式にはまらないことがあるが、とにかくはめて書く。ここで紹介する形式は、太古の昔から学問の世界で使われている。一番、人間が理解しやすい形式がこれである。

- ごく手短に、直前にのべた研究目的に触れる。

まず、ちょっとしたまとめから始める。選考委員が常に、すべて書いてあることを読んでくれると思うのは甘い。ときどき、まとめをいれることで、それ以前を読んでなくても、ある程度、流れが分かるようにする。

- 先行研究（またの名を FRAMING）

次に先行研究だ。ただ、実際の論文の先行研究とちがってスペースが限られているから、ながながとできない。この部分は FRAMING という機能をもたせる。FRAMING というのは、どのようにこれからとりくむ問題を FRAME するか、料理するか、整理するか、、、ということだ。

先行研究・FRAMING の語り口にはいろいろなパターンがあるが、いずれにせよ、大きな背景からはじめたい。英語でいうと、BIG PICTURE からはじめたい。

FRAMING 要領 1

1. 世間では（学会では）このようなことが重要しされている。
2. それについて A はこういっている
3. それについて B はこういっている。
3. 両方に、欠点がある。必要なのは A と B を合体させることだ。

FRAMING 要領 2 本当かどうか

1. こうこうこういう重要な問題がある。
2. それについて A はこういっている。しかし、それは理論だけで証拠がなかなかでていない。なぜか？
3. それは、こういう視点がたりないからではないか？
4. 私は、A の理論をこの視点から洗いなおすことにする。

FRAMING 要領 3 フーコーの好きな歴史の人がよくやるパターン

1. こうこうこういう重要な問題がある。
2. A はこんなすごい理論で、理論的影響をあたえた。
3. 私はその理論を借りて、XX についての解釈を考え直したい。
4. するととても新しいものが見えてくる。

FRAMING 要領 4 ミクロとマクロの統合パターン

1. こうこうこういう重要な問題がある
2. ミクロのレベルではこういわれている。
3. マクロのレベルではこういわれている。
4. ミクロとマクロを統合するような理論が必要である。

FRAMING 要領 5 ブラックボックスの比喻

1. これまでの理論は、現象を外から眺めてきた。

2. 例えば、XXX という現象は YYY といううつわの中で起こるのにもかかわらず、YYY の内部にたちいった研究は行われていない。
3. つまりこれまでの研究は、YYY をブラックボックスとして扱ってきたのである。私の研究は、このブラックボックスの内部のメカニズムを検証することにある。
(教育社会学で、よく学校をブラックボックスとして扱うな！ということを言います。マイノリティの子供のドロップアウト率が高いときに、学校のマクロ的な特徴（例えば図書館の本の数とか、先生たちの資格とか）ばかり気にして、実際の教室内部でおこる社会組織的なダイナミックを無視した研究が多いのです。それはデータがとりにくいからということが主な理由だと思います。こういう状況をブラックボックスの比喩をもちいて批判できます。)

FRAMING 要領 6 方法論的に間違っているのだ、、、という指摘

1. ある問題はもっぱら量的手法（例 統計学）によって分析されている。
2. しかし、量的手法では、この問題は分析できない。なぜなら、、、
3. 質的手法を使うならば、よりよく分析できるのだ。なぜなら、、、
4. 私は質的手法を使うことによって、この問題を新しい観点から見直してみたい。

FRAMING 要領 6 異なった方法論がいる！

社会科学において、質的研究と、量的研究というのがある。インタビューやエスノグラフィーなどの質的研究のみしかされていないテーマに関しては、それを批判したうえで、量的研究（サーベイ、統計をつかったもの）を提案するとよい。その逆もありうる。社会科学だと、こうだけでも、その他の分野でも手法に関する議論があるのではないだろうか？

• オリジナルな理論

次は理論である。オリジナルなものでなければ、銭をもらう資格なしである。奇抜でなくともよいが、はっとさせられるものでなければならない。オリジナルな理論構築の方法については、ページを他の場所にさいているので参考にさせていただきたい。

理論とは単なる描写ではないし、「XXを理解する」というあいまいな言説ではない。理論とは、なぜ君の興味の対象である現象が起こるのかということに関する説明である。その例：なぜ日本茶は体にいいのか？これらの設問にたいして答える試みを理論と言う。たいてい全てのことは言い尽くされているから、それほど奇抜なことは言えないにしても、独特のアプローチによってその現象を説明するという具合になる。

また言い換えれば理論を構築するとは、メカニズムを考えるとということでもある。なぜガンになるか？何がどうなっとうなるからガンになるのかを問うことがメカニズムを問うということである。もちろん、世の中の現象はそう簡単には語れない。しかし、研究計画という限られたスペースにおいては、現象を簡略化して考える必要がある。（簡略化したということにかんする反省は最後の Conclusion で触れる。）

ただオリジナルな理論とはいえ、全く新しいことを提案するというのは、殆ど無理である。(もし、万が一にもものすごい理論を提案するのであれば、学振の申請書を書くよりも、まずは、特許申請などを心配したほうがよいだろう。)特に社会科学系では、全く新しい理論を打ち出すのは、学問の仕組み上無理だと思われる。メソッドを使うときに、正しく使うことができないことのほうが多いので、過去に、同じようなやり方でやった人がいます、、、とアピールしないと認めてもらいにくいく(ジャーナル審査で批判されてしまう)。

とりあえずは、小さな理論でよいのである。今まで分かっていることがすでにあって、それをちょっと前進させるという感じで良い。勝手に例を作り上げてみよう。お茶を飲むと、ある病気が減ると分かっているとしよう。そしたら、それが男女変わらず効くのか、人種を超えてきくのか、お茶の種類によってどうなのか、、、など、小さなことが分かっていると。そういうのを取り上げてきて、理論にしてしまうのだ。例えば、なぜ効果に男女差があるかを理論化してみるのだ。

社会科学などでよく使われる理論的展開を紹介しよう。これは、シカゴ大学社会学部のアボット先生の本の受け売りであるから、きちんと引用先を示しておく。

ANDREW ABOU

Methods of Discovery: Heuristics for the Social Sciences

この本は、社会科学のResearchのアイデアをどうやったらうまく生み出すことが出来るかに関する本だが、実際は、内容は鬱になってしまう。氏が社会学の代表的、古典的Researchとしてあげている内容が結構、姑息な感じのするResearchだからである。私の主観かもしれないが、「そんなことResearchせんでも、分かるのではないか、、、」というようなことが、創造的な理論として紹介されている。

少し例をだす。ハリソンホワイトという社会学者は、人が職業的地位を上げていくプロセスを研究した。経済学者であれば、人の職業的地位は個人の人的資本によって決定されるとする。しかしホワイトが発見したのは、実は、個人の昇進は、ポジションの「空き」があるかどうかによるのである、、、と。

こんなんでよいのかな、、、という気持ちがあるが、とりあえず、こういうのが社会学では創造的な理論的営みとされている。とりあえず、こういう考え方を真似ることで、「想像的」な理論を考えてみたらどうだろう。

とにかく普通言われていることを逆を考えてみるのである。誰かが、教育には、社会資本(助け合いなど)が大切だと言っているならば、その逆を言う。あるいは、場合によっては社会資本があだとなる、、、というような理論を考えてもよい。

りんごが体によいという理論があるならば、りんごが体に悪いという可能性を理論として打ち出すのだ。

ただし、自然科学でこれをやる必要はないかもしれない。自然科学においては真理を素直に追究すればよいのではないだろうか。人文や社会科学などでは、上に書いたような「創造性」が結構受ける。

- 仮説

次は仮説である。上に述べた理論が正しかったとすれば、このような結果を見るであろうというような仮説を幾つか紹介することによって、審査員は具体的に君の研究計画を理解する。

ただし、分野によっては仮説というかたちでは、表現しにくいことがある。文学や人類学においては、原因と結果の関係を知らることが、必ずしも第一の関心時ではない。第一文献の世界に身を投じたり、あるいはフィールドにはいって行って、ゴリラとともに生活しながら、ゴリラの社会生活を調べ、描写することも研究の様式であろう。

その場合は、「リサーチクエスチョン」というモードで仮説を語るとよい。次のような幹事である。

- 1、ゴリラはどのような共同生活をしているのか。
- 2、ゴリラは葬式をするのか。
- 3、ゴリラにとって男らしさ、女らしさとは何か。

もちろん、質問を並べるだけでなく、なぜこれらの質問が大切なのかというのが分かるような筆の運び方をする必要もある。なぜ、これらの描写が大切なかをちゃんとと言えないといけませんが、このようなりサーチクエスチョンは、きっとゴリラを深く理解することにつながるであろう。

- データと方法

データそして、いかに自分の仮説をテストするかを簡単に述べる。根本的に考えてどのような結果があれば、君の仮説が確認されるのかを書く。以下のような構造をこの部分にもたせる。

- データ（何を集める？どうやって集める？）
- 方法（手法は何を使う？何を計る？平均を比べる？）
- どういう結果がでたら、理論がサポートさせたことになるか

こういう筆のすすめかたは、理系だけではなく、文系であっても必要だと思われる。例えば、夏目漱石の文学を研究とするならば、夏目漱石の作品がデータであろう。また、特に夏目の作品のなかの、どういうシーンが分析対象のデータになるのであろうか。

方法論とは、以下に、自分の唱える理論、あるいは理論的修正を証明するかに関する方法である。科学においては、すでに方法論が確立されているので、簡単に書くことができるだろう。いろいろ難しい方法はあるにせよ、統計を使うのであれば、結局のところ平均を比べることだ。例えば、肥料を与えた田 A と肥料を与えない田 B ではどちらが収穫量が多いかということだ。結局のところ、収穫量の平均を比べることだ。

ただし、平均を比べますでは、芸がないので、難しい統計モデルなどを使うのであれば、

簡単に名前を触れておく。分野ごとに、ホットな方法論がある。例えば、アメリカの教育研究であれば、HLM を使いますという、審査員がなんとなく納得する。もっと一般的な社会科学では GIS が脚光を浴びている。GIS を使いますというだけで、審査員の関心をつかむことができるかもしれない。

- 準備的分析

さて、これは結論の直前で書く。理論や、仮説、データなどなど全てを言い切ったあとだ。君の理論や考え方があまりに想像的なので、読み手はちょっといやがるかもしれない。「確かに面白く、こういう研究があってもいい。でも、本当に奴が言ってるような結果がでるのか？ 金を投資するにはちょっとリスキーじゃないか。」こういう読者の警戒心をほどいてやるには、ちょっとした分析結果に触れることが重要。詳しくなくとも良い。1パラグラフぐらい。

第一の効果、君がそれまで書いてきたことをどのように分析するのかということが具体的に読者に伝わる。例えば、[スイカが精神に与える影響]というテーマでやってるとしよう。ちょっとした分析に触れれば、読者は次のことを知る。君がどのように、いろいろなコンセプトを数量化するのか、どのような仮定をするのか、どのような手法を使うのかということ。これらのことは、副産物。

本当の理由：結果を示すことにより、君の理論にも一理あるんじゃないかなーってことを、ほのめかす。

- 結論の書き方

- テーマ、アプローチの再紹介
- 準備的分析の結果を簡単に述べ、以下に、自分の考え方をサポートしたかを書く。
- 反省の時間（自分の理論の弱点について述べる）
- 理論的貢献
- 政策的貢献、实际的貢献（どのように世の中のためになるか）
- 今後の研究の方向
- テーマ、アプローチの再紹介。くどくなつてはならないが、読者がここまでの君の研究計画をまじめに読まなかった場合を想定して、丁寧に全体をまとめるような文章を2、3。（万が一にも、もう一度まじめに読んでみようという気がおきるかも）。まじめに読んでもらった場合でも、まとめは必要。

準備的分析の結果を簡単に述べ、いかに、自分の考え方をサポートしたかを書く。これは、謙虚に書く。なんでもかんでも、最初からうまくいっていると、少し不自然。いろいろ問題はあがるが、いちおうは自分の提案している理論的思考に大きな意義を唱えるようなものはなかった

というぐらい。

反省の時間（自分の研究の弱点について述べる） 自分の研究の弱点を知ることが実は、「強み」である。弱点をかくすことは、学問の発展をさまたげる。特にあとに続いて研究をする人たちが、この研究の弱点を知っていれば、自分のリサーチを発展させる上で役にたつ。

弱点はいろいろあるだろうが、方法論的なことをながなが書くと、読むのがしんどい。そういうテクニカルなことは短く。特に、理論的に、君が今回の研究計画においてはフォーカスを絞ったので、君の理論以外にありえるファクターを軽視したということを使うとよからう。研究対象となる現象は（理系、文系にかかわらず）複雑であり、自分の理論にはなかなか乗らないが、これからはじめる研究においては、その他のファクターもじっくり見ていくということを使うのがよい。

理論的貢献は、おそらく最も重要な部分であるが、もう述べているはずなので、3つか4つぐらいの分かりやすい文章でまとめる。

政策的貢献、实际的貢献（どのように世の中のためになるか）。これは、まだ述べていない。いかに、世の中のためになるのかについて、語れなければ税金をもらう資格がないので、がんばって書く。ただ、アカデミアのもっとも重要な仕事は理論構築と検証であるから、具体的な貢献だけしかないというのは絶対困る。

今後の研究の方向。これからどのような手順によってリサーチをすすめていくかを簡単に述べる。年次計画の欄で詳細することができるので、はぶくこともできるが、研究計画の最後の文章なので、いい印象を残したい。新造の船が、大海にむけて、港をでていくイメージをのこしたい。

研究の特色、独創的な点

これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

妙なことに、この項目は従来の研究計画のフォーマットにはないものだ。なぜなら、特色だとか独創的な点というのは、すでに述べているはずだからだ。文献研究において、これまで過去の研究と提案する研究計画の継続性、そして新しい点を述べているはずだ。また理論を述べる点で、独創性はあきらかなはずである。不思議なセクションである。

では、このセクションを軽んじてよいのだろうか。私の予想であるが、このセクションは、審査員同士が集まって意見を交わすとき、それも特に面接のときに最も重要な部分ではないかと思う。面接は4人ごとで1グループになって行われる。4人一緒にやるのではないが、4人が1ユニットとなり、ポスターが4枚分はられる。きっとこのユニットごとに審査員が相談したりするのだろう。で、その4人の面接が始まる直前、そして面接の途中、そしてその後など、審査員は申請書に目を通すと思うが、

そのとき一体、申請書のどこを読むのだろう。現在までの研究とか、年次計画は読まないと思う。きっと申請書の4ページ「研究目的」と6ページの「研究の特色、創造的な点」を速読することで、クイックに理解を得ようとするのではないだろうか。特にこのセクションは、研究計画がその研究計画書じたいの評価をするという妙な構造をもっている。ブックレビューみたいなものだ。したがって、面接中に面接官のかたが計画書にがさがさ目を通してはいるのは、きっとこのあたりを見ているのではないかと思う。

私のこの推理が正しいとしよう。するとここに書くことは一つのテーマに絞ったほうがいいと思う。あるいはいろいろ書いているように見えても、実は一つの重要な点にテーマが収斂しているようなレトリカルな構造をあたえたい。英語でいえば take home point とか executive summary とかいうらしいが、読んだ人の脳裏、あるいは面接官の脳裏に焼きつく一つのポイントが、書かれていなければならない。

なぜ面接を意識して、このセクションを書くのか？面接を受けたものはわかるが、面接の途中にも他の面接官が質問しているあいだ、面接官は、がさがさ計画書を読む。このセクションを速読することで、どんな質問をしてやろうかと考えているかも。ある意味では面接官に対して「わな」をしかけるのである。地雷である。ここのセクションに、ある意味で面接官に聞いてほしいことを書くのだ。あるいは、ここに書いたことをよく考えておく。そして、ここに書いたことは何を聞かれても分かるようにしておく。

だいたい面接官の質問というのは、グローバルQというのと、ローカルQというのがある。グローバルと私が呼んでいるのは、きっと皆に聞いているであろう質問だ。例えば、なぜこのトピックを選んだか、なぜAとBを比較することを選んだか。あるいは、その分野でよくすでに言われていて、誰も答えをもっていないようなこと。なぜ、グローバルQがあるかというのと、何十人、何百人にいちいちオリジナルな質問ができるほど人間は器用ではない。

ローカルQとは個々の研究計画にとって独特な質問であるが、この手の質問は、まさに「研究の特色、独創的な点」を面接官が面接中にがさがさと速読するなかから出てくる、、、と私は

想像する。

年次計画

毎年科研費のことでここに書いたことについて報告するので、あとになってもかなり見直す使う文章になる。この文章をみながら、その年の実績を報告することになるので、3年間つきあうことになる文章だ。もちろん計画が変わってもいいのだろうが、何か変えらるとなると誰かに相談したりしたくなるだろうし、そういうのを事務の人に聞いたりするのもめんどうだ。

一つ工夫できることがある。それは、年次計画に以下に自分が他の研究者や、専門家と交わるかということを加えるのである。専門家の人にあらかじめ相談しておいて、アドバイスがもらえるように話をつけておく。そして、何月何日に、XXXさんに研究成果を読んでもらう、、、というようなことを年次計画に加えておく。(すると研究計画自体がとても具体的になるのである。)

自己評価

DCの応募においては自己評価という項目があります。応募書類においては、以下の指示がされている。

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人による自己評価を次の項目毎に記入すること。

研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等

自己評価する上で、特に重要と思われる事項(特に優れた学業成績, 受賞歴, 飛び級入学, 留学経験, 特色ある学外活動など)

ここでも目的は以下に自分が研究者として、研究計画をやり遂げる資質を持っているのか、ということを理解してもらうことである。審査員がこのセクションを読み終わったときに、「この研究者はよい資質を持っている」と感じ、「これならば、この研究計画をやり遂げることができるぞ」と確信すれば、勝利である。

まずは「研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等」のうちの前半、「研究職を志望する動機」から考える。これは、「研究の背景」のところでも勉強したステップ1を思い出して欲しい。

ステップ1 テーマに選んだ現象がいかに、人々や社会を苦しめているかを述べる。

研究職を目指す理由は、こういう大きな問題を解決することに関係しているはずである。このステップ1で書いたことに関連づけながら、書くとよい。

ただし、例えば癌に関する研究計画が全て同じような語り口になっては困るので、個人として何かアピールできる要素を加えられるとよいだろう。感情に訴える部分があってよい。例えば、知っている人がある病気になった経験を持ち、それを直す治療法を発見したいというのであれば、それを書いてもよいだろう。

審査員というのは、一人、何本も計画書を読むので、ひとつひとつの計画書に書かれている細かい部分を忘れがちであるが、こういう個人的なエピソードというのは、頭に残りやすい。

さて、次に「研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等」の後半の二つの項目考えてみる。つまり、「目指す研究者像と自己の長所」についてである。この二つの項目を一緒に語るためのフォーマットを下に提案する。

まずは、深く考えてみる。研究者として大切な5つのことを考えてほしい。これは人と違っていてもよい。自分の考えで、研究者として大切な点を5つ考える。例えば、

- 科学的態度
- 実際にリサーチを実践する能力（雑用のようなことも含めて）
- 一貫した理論的関心興味
- 政策的意義、あるいは実際の意義への関心
- その他、考えつくスキル

5つほど、と書いたが、このように、自分にとって大切と思われる項目を思いつくのも、一つの分析能力だ。人と違っていてもよい。⁵

⁵ さて、私が適当に選んだ項目の幾つかに関してコメントしておく。科学的態度というのは、いろいろあるが、ドグマにとらわれず、データを大切にアツカイ発見していこうという態度が一つあると思う。最も下らない学問とは、本を読んで本を書くというスタイルのものだと考える。これでは理論が発展しない。そうではなくて、理論を発展するために、データを見る。それから得られた知見で理論を発展させる。

さて、方法論を理論的に知っていることと、実際のリサーチができることは少し違う。実際に、計画を立てたりインタビューにいたり、実際にメスを握ったということをしたのであれば、それも一つのスキルである。

実質的理論的興味は絶対に必要だ。過去の研究を通じて、理論的関心を育んできたということは重要である。例えば、「社会のマクロ現象がいかに人間行動に結びつくか」というような大きな理論的関心のことだ。このような理論的テーマを過去の研究を通じて育んできたということだ。多くの学生が、ただ単にコンピュータが好きだと統計理論が得意だというだけで、理論的に意味のうすい研究をしがちだ。ひとつひとつの論文は小さいステップであっても、大きな理論的な貢献に向かっているなければならない。

もうひとつ研究に重要なスキルは、研究の社会的（実質的）意義を考える能力である。政策に関わる研究ができる能力は一つの技術である。これらの項目は、過去のひとつひとつの研究がどのような経験を自分に与えてくれたかのヒントになる。

さて、色々考えたら、書き始める。まずテーマは「研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等」である。

書き始め

「研究職を志望する動機」を研究の背景のところ勉強した「ステップ1」に絡めながら書く。つまり、以下に大きな社会の問題を解決することが、研究職を志望する動機となったかを論ずる。個人的な事情に絡めて、書くとは感情的に訴えることができるだろう。

中間

研究者にとって大切な5つのことを、大切でない順番で述べる。そして、そのそれぞれについて、自分がそれに優れているか、あるいは劣っているのかを述べる。劣っている、、、とはっきり言う必要はない。経験不足であると表現すると良いだろう。ただし、劣っている点を上げる場合は、どのようにして学振のサポートが、その欠点を補うのに役立つかを書けばよい。構造としては以下のような感じだ。

まずはまとめ

理想の研究者は以下の5つのことを備えていなければならない、、、。

理想1

研究者にはXXXが大切だ。

自分はそれに優れているというアピール

(そうでなければ、それを欠点としてあげ、どのように学振が助けてくれるかということ具体的に述べる。)

理想2、理想3、理想4、理想5と繰り返す。(5つが多すぎると感じるならば、3つぐらいでもよいだろう。)

まとめ

最後に、以下に自分の持つ長所が、研究計画を支えることになるのかを書く。また以下に学振からのサポートが自分の欠点を直してくれるのを助けてくれるかを書く。

まだ、このセクションは終わってはいない。以下の点について論じなければならない。

自己評価する上で、特に重要と思われる事項(特に優れた学業成績, 受賞歴, 飛び級入学,

留学経験，特色ある学外活動など)

さげなければならない点がある。このセクションには、ごちゃごちゃした色々な情報が書かれることになるだろう。留学したとか、飛び級したとか。下手をすると、読むのがとても面倒くさくなるかもしれない。

それぞれ書く事項をなんとか、上で述べた5つのことにつなげて書くのである。例えば、留学ということについて触れるのであれば、以下にその留学中に経験したことが、研究者としての理想の項目としてあげた事項に関係したかを簡単に述べる。

いろいろごちゃごちゃ書くが、何が究極な目的なのだろう。審査員は、結構、あなたがどうい人物かということ、このセクションを読んで感じる。あなたの研究計画を読んだあとに、会議室でその他の審査員を議論をする。そのときに、審査員の頭に強烈にあなたのイメージが残っていなければならない。

天下の宝刀 PAR メソッド

以上で、自己をアピールするための枠組みを説明したが、もう一つ紹介したいテクニックがある(といっても、申請書の書き方のところで少し触れた)。PAR メソッドと呼ぶテクニックだ。自分のアピールするときに、「自分はすぐれています」と誰も言わない。あまりに主観的すぎるからだ。言っているほうも照れるし、聞いているほうも、信じていいかどうか判断がつかない。そこで PAR メソッドを紹介したい。

P は PROBLEM、A は ACTION、R は RESULT である。自分にはリーダーシップがあります、、、と
いいたいとしよう。まずはそれを言ってしまう。

「自分にはリーダーシップの能力があります。」

次に、P (PROBLEM) だ。研究上、こういう問題が置きました(具体的に説明)。

次は A (ACTION)。私はこういう風に対処しました。

最後に R (RESULT)。結果はこうでした。

自分をアピールするときに PAR を使えば、具体的となり、審査員の頭にも残りやすい。ここでちょっと考えてみたいのだが、PAR ではないアプローチとは何だろうか。謙虚な人が、ついついやってしまいがちなのだが、**こんなことを学びました、**、、、という言い方だ。例えば、「私は大学院で XXX 先生のプロジェクトで統計分析を担当しましたが、HLM、ラッシュモデルといった統計モデルを深く学びました。」という言い方だ。「こんなことを学びました、あんなこと

を学びました」というのは謙虚な感じがするのだが、グラント申請において大切なのは、「グラントを通じて、こんなことを学び続けたいです」という**甘っちょろいことではない**。私には、こんな経験があり、こんな修羅場を乗り越えてきたので、こんなことができ、こんな結果を出してきました。税金を使ったグラントをもらえた暁（あかつき）には、即、この能力を生かして結果を出します、、、というメッセージが大切だ。このことを文字通り言うということではなくて、そういう感じのエネルギーを審査員に読み取ってもらう。そのためには PAR が有効である。

ただし、PAR ばかり使うと、全体が具体的になりすぎて、読むのがめんどくさいので、全体のバランスも考えるようにしてください。さくっと言えるところはさくっといってもよい、、、ということです。P, A, R で三つ要素がありますが、三つの文を並べるということではなくて、できるだけ手短にまとめた文の中にこの3つの要素が発見できるように、、、ということです。

V. チェックリスト 書き上げた後で

審査員が研究計画を読む際に、机の上に置くのは何だろう？当然、研究計画書である。しかし、その横には？、、、審査の結果を書き込むスコアシートである。そして、そのスコアシートには、いろいろな項目を含んだ表があって、その表に審査員が点数をつけていくのだ。残念ながら、実際のスコアシートを見たことがない。もし読者のなかに、なぜか審査員をしたかたがいらっしゃったら、ぜひ内容を教えてもらいたい。というより「が苦心」側のほうが公表してくれてもよいように思う。実は、このスコアシートがとても重要なのだ。なぜならこのスコアシートに点数をつけるのが「が苦心」から頼まれた仕事なのである。

あるとき、教育省のベテランによる研究計画のかきかたの「こつ」のワークショップに参加した。そこで、目からうろこがおちたのが、まさにこの章のトピックである。教育省ベテラン氏が言うには、まずプロポーザル募集の広告をしっかりと読み、なにが求められているかを理解する。そして、求めているものを箇条書きにし、それぞれの項目が、自分の研究計画の何ページに書いてあるかを1ページにまとめて、研究計画の最後につける、、、というのである。

なぜだろう。それは、米国の教育省の審査員の仕事は、研究計画を様々な項目によって点数化することだが、その点数を書き込むスコアシートには、研究計画の一体どこに、その項目が書かれているかを書き込む欄があるらしい。応募者のほうが、ていねいに、それを示すページを加えておけば、そのページは、審査者にとって、とても便利なのだ。

が苦心の研究計画書は短いし、様式がはっきりしている。(米国には様式書というのはなく、レターサイズの紙にダブルスペースということだけが決まっている。)したがって、ここまで細かくすることはない。しかし、が苦心の審査員が求めているものが、計画書のなかに入っているかどうかをチェックする必要がある。また、はいつていれば、はいつている部分を強調したような文体でハイライトしたり、イタリックで飾ったりということも考えられる。

さてチェックする項目であるが、現在のところ一体「が苦心審査員」がどのようなスコアシートを用いているのかはわからない。手ががりとして、学心 HP の応募の詳細を見てみよう。

http://www.jsps.go.jp/j-pd/pd_houhou.htm

特別研究員の選考方法

2. 特別研究員の審査方針は、(1)研究業績が優れており、学術の将来を担う優れた研究者となることが十分期待できること、(2)研究計画が具体的であり、優れていること、(3)PDについては、大学院在学当時の所属研究室以外の研究室を選定する者、(4)各分野の研究者養成の必要性を配慮すること等です。

3. 書面審査による評価は、(1)研究業績と(2)研究計画のほか、推測される研究能力、将来性、学位の有無などを含めて総合的に判断したうえ、4段階の評点(A:特に優れている、B:優れている、C:普通、D:普通より劣っている)を付けます。

研究が優れている

まず分かるのは研究業績が優れていなければならないが、これは研究計画のなかで読者に訴えらるゝとするなら、自分の研究を引用する文章がひとつぐらいあってもよいだろう。

チェックポイント1 自分の過去の研究をひとつぐらい引用する。

学術の将来を担う研究者となることが期待できる

将来性

その分野において、先端を行っているということをアピールするような文章がいくつかほしい。もちろん「私は先端を行っています」というふうに文字通り言ってしまうと、読者に強くアピールすることはできない。これまでになかった内容を提示することが必要となる。

チェックポイント2 「これは新しい、、、」と思わせる内容があることを確認。でも、ただ勝手に新しいときめつけてもだめ。新しいという形容詞を使わずに、新しい、、、と自然と読者が思うような、文章がまじっているように。

チェックポイント3 今後の学会の流れを予測するような文が一つぐらいほしい(そしてそれにどう対応していきたいのか、、、も)。例えば、アメリカの教育リサーチにおいて、学力測定が熱心にされているが、問題点が多く指摘されている。例えば、学力を測る、、、といっても、そもそも計れるのか、、、という問題がある。アメリカは莫大なお金をかけて、学力測定をしているわけだが、今後はどうなっていくのだろうか。あるいは日本の社会学では、量的なメソッドの弱さが指摘されているが、今後は、数字で証拠をだしていくようなアプローチが望まれている。この分野はこういう方向に向かっている、、、というような感じのニュアンスを出し、それにどう対応していくのかを示せば、「将来を見越している」という印象を強く与えることができる。

具体的であること

具体的でない研究計画とは何かを説明することはたやすい。こういうことを言われたことがないだろうか?あなたの従属変数(説明する対象)が何なのか、5ページ読むまでわかりませんでしたよ、、、と。

一パラグラフめを読んだ時点で、「この人の従属変数はこれこれで、独立変数はこれこれ

だ。」ということが研究計画においては、はっきりしていなければならない。また、その手法、仮説、データ収集の計画などが具体的であるべきである。後者はそれほど難しいことではない。

チェックポイント4

- 1パラグラフめを読んだ時点で、「この人はXXXをXXXでもって説明しようとしている」のXXXとYYYの部分が埋められるように。
- 手法はXXXを使う。
- 仮説はXXXとXXXである。
- この人は必要なデータをXXXにて集める。
- 最終の文を読んだときに、これからこの人がどの方向にすすむか、なんとなくイメージできる。

2005年の応募書類を見ると、推薦人である教授が使う評価書に次のような項目があった。強調しておくが、これは申請者が書く書類ではなくて、推薦人が書く書類である。これから、何を学振が申請者のクオリティに求めているかを垣間見ることができる。これらのクオリティを応募者が持っているということを、応募者自身がアピールする、、、ことをお勧めする。

さて、評価書には次のようにあった。(2005年4月の段階では以下のサイトにあるhttp://www.jsps.go.jp/j-pd/pd_sin.html)

申請者の研究姿勢・忍耐力、研究の進捗状況、専門的知識・技量、着想力・創造力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、将来性などについて記入してください。また、研究の獨創性又は特色も明記してください(その研究が共同研究である場合は、特に申請者の当該共同研究において果たした役割及びその寄与の程度が分かるように記入してください)。

研究姿勢 忍耐力

研究姿勢というのは、学者、科学者として大切な姿勢のことである。私自身、論文を読んだり、学者の発表を聞いて、学者の資質を思うとき次の点が気になる。

1. 主観的でなく、客観的であること。例えば、文系や社会科学系だと政治的な信条によって結果が左右されないということがある。つまり、研究と個人の意見を分ける。あるいは、もしあえて「意見」を述べるなら(例えば、人類学においては、研究者の意見や体験といったものを無視できない)、それを素直に認め、そのことをどう考えるか、あるいはそのことがどのように結果に影響を与えるかなどということに関して、理解し、理解してもらう必要がある。また、仮説に関して、主な仮説に加えて、代案的な仮説も用意しておく、この点をアピールできる。例えば、主な仮説はAだし、今回、特に力を入れて説明したのはAではあるけれども、結果によってはBと

いう可能性もありえる、、、というようようなことを少しだけ加えたい。

2. こうなってほしいという気持ちを結果に影響させないこと。また全般的に言えるのは、自分の思い込みや「こういう結果があってほしい」ということにも左右されてはならない。分野によっては、研究を始める前から、結論が分かっていると思われるものがある。例えばであるが、いかに戦争イデオロギーが作られていったか、、、を研究する人は、なんとなく最初っから「とても邪悪なイデオロギーがつけられたのだ」という勢いがあまりに研究計画に現れすぎる。かえって、自分の思い込んでいたこととは逆のことを発見することこそが、科学とか学問の楽しみである。
3. 研究の問題点に関してオープンであること。学会発表を聞いていると、問題点があっても、それをできるだけ出さないような研究者がいる。発表時間が少ないという問題もあるだろうし、あるいは研究計画においてはスペースが限られているという問題があるだろう。しかし、なにからなにまでパーフェクトな研究は絶対に存在しないし、弱点に気づいている学者ほど、すぐれているということもいえる。

進歩状況

私は今、アメリカのシンクタンクで働いているが、そこで気づいたことがある。ボスが嫌がるのは、仕事の進行が遅いということ自体ではない。ボスが嫌がるのは、一体、これからどれだけの仕事が残っていて、それをどういう計画でやっていくかということだ。もし、遅れておればボスには対処方法がある。助手をもっと配置するとか、、、これと同じことが進歩状況にも言えるのではないだろうか。研究計画においては、その研究内容に対して、どの段階にあるかを明確にし、またこれから何をすればよいのか、ということが明確になっていることが大切だと思う。また、そのこれからのタスクを終えるためには、どのようなことが必要なのか。例えば、これは自分自身の PROFESSIONAL DEVELOPMENT をも含むことになる。例えば、自分の研究を完成させるためには、あるメソッドが大切であるが、それについての知識がまだ足りていないとしよう。それをどう補うのか、、、を具体的に示すこともよいだろう。⁶

専門的知識 技量

着想力 想像力

⁶ そういう弱点というのは、結構、個人の弱点というより分野全体の弱点だったりする。たとえば、日本の社会学界では、メソッドの弱さが指摘されているが、そういうことは学会全体の問題だから、自分がそれに強くなることで、学会全体も益を売ることをアピールしてもよい。直接でなく、間接的に、また非常に簡潔に。アメリカの教育リサーチ界では「実験」をメソッドとして使うことが、少しずつ盛んになってきているが、どのように実験をするのか、、、についてまだまだ全体としての理解が足りないことがある。例えばベンジャミニコレクションというある統計の方法があるのだが、教育省のトップの会議にいても、まだまだどうやって応用したらいいかを、延々と議論しているほどである。自分の弱点なのか、学会全体の弱点なのか、、、というのを見抜くとよい。

コミュニケーション能力とリーダーシップ

将来性

学位の有無

PHD をもっていると、かなり有利だと思う。私など、PD 申請の段階で、出版などはほとんどゼロに近い状態であったが、PHD を持っていた。私の知っている人も、PHD をもっていて、出版はゼロだったと思う。PHD はかなりの点数に換算されるのではないだろうか。

VI. 再考 研究の背景及び国内外の研究状況

ある分野全体に影響を与えたい場合。いいかえれば、その分野で最も権威のあるジャーナルへの投稿を狙う場合である。その場合は、BROADに学会全体に語りかける必要がある。これはどういう意味か？君の研究を、限られた数人だけでなく、多くの人たちが読みたくなるようにするということである。

ここで、使う方法は、人々の顔を思い浮かべる方法である。その分野で同じテーマを別の角度から研究している2つか、3つのグループにわけてみる。テーマということの意味は「独自の理論を構築する方法」の5段落ですでに述べた。ちなみにこれらのグループの研究者たちは、その分野の古典であったり、一流の学者であったりするだろう。きまって、グループ構成は出身大学で決まっていたりする。

そして、各グループに関して次のことを考える。

1. どのように、そのテーマに取り組んだか。
2. 幾つかの論文があるか。
3. その人たちの欠点を、どのようにこの自分の研究が補うことになるか。

特に3を考えると、その研究者たちの顔を思い浮かべる。昔の学者で死んでいたらこれはできまいが、生きているなら、その人たちの学会発表の姿や、国際会議でのレセプションで会話などを思い浮かべ、その人たちが君の研究計画から何を学ぶことができるか、ということを考える。それはなんらかのかたちで、その人たちの盲点となっているものを補ってあげられるものだ。

まずは、そのグループごとの欠点を10個ぐらい書いてみる。そして、その欠点のなかで君の研究が関係していて、将来その欠点を補うようになることはないだろうか？例えば、マルクス学派の革命論の欠点は、

- 革命がおこらなかった。
- 今の時代をとらえていない。
- 個人のレベルでの分析がなさすぎる。
- 資本家たちが本当に連帯して弱いものいじめをしているのか。

などなどなどなど。これらがその学派の欠点だ。で、一体、これらのどの点を君の研究が補うことになるのか？ここで、マルクスさんの顔を思い出し、どういうことを君が発展させてあげれば、あの叔父さんが喜ぶかを考える。

上を実践したあとに、以下のようなアウトラインをつくる。

1. 説明対象の定義、そしてその重要性
2. 3つ(スペースの都合によっては2つ?)の学派紹介 それぞれに対し、

その人たちがどのように、そのテーマに取り組んだか。

幾つかの論文を、一文にて紹介。

その人たちの欠点を、どのようにこの自分の研究が補うことになるか。

3. まとめ

3つの学派の欠点を補うことで、どのようなメリットがあるかを簡単に述べる。(具体的には、この点をこのあとにくる研究内容が明らかにするのだ。)

以上の方法が、私が最近発見した方法だ。なずけて「Face reflection method」だ。私は、日本語の書き方で主張してきたように、研究計画を書くときは、「忙しい学者」、あるいはあえて、ばかなバカポンを想定しようということを考えてきた。目的は、誰にでも分かる日本語を書くためであった。しかし、文献研究にいたっては、この方法に限界があることに気がついた。(読み手をバカポンと想定しては、このセクションは書けない。)

私はFACE REFLECTION METHODを編み出す前は、研究とは孤独な作業であり、映画でいうとTOP GUNにでてくるトムクルーズが演ずるMAVERICK(一匹狼?)を想像していた。しかし、以上にのべた方法を実践しはじめていらい、得に感じるのは、研究とは、学会全体がこれまで蓄積してきた知に対して、貢献を与えるものだ、ということだ。

さて、「研究の背景及び国内外の研究状況」で書いたことは、研究計画の最後のほうで書く理論的貢献を考えるうえで、かなり役立つ。上でかんがえたように、これらの学者たちの欠点を補うことが本当にできるとすれば、それはすごい理論的貢献だからだ。

残念ながら、これに関しては今書く時間がない。

VII. 再考 貢献の仕方 いろいろなパターン

先行研究を語る際は、すでにある研究をかたるだけでなく、それをどのように料理するか、ということ述べなければならない。英語だと、FRAMING とよぶ。どのように問題を FRAME するかを決定するのが、先行研究を語るときに見えてこないといけない。FRAMING とは、以下にリサーチ問題を料理するか、ということであり、これは、いかに学会に貢献するかという問題に近い。

研究とは何かはまだよく分からないころは、一体自分にどのような新しいことが言えるのだろうと、悩むことがある。「ノーベル賞学者が評価された仕事は 30 歳までにすでに確立していたことらしい」などという言説に惑わされ、一体自分には才能がないのではないかと悩むこともあるだろう。新しいことを言うとか、オリジナルな研究をするといったことは素晴らしいことではあるが、そういうことは本当の天才にしかできない。音楽の世界でいえばモーツァルトとか、ゴルフの世界でいえば、タイガー君のような天才たちにしかできないことだ。

では、平凡な研究者には何が残されているのか。まずは科学とか学術コミュニティの原則に立ち返ってみよう。我々の責任は、それぞれの分野に貢献をすることである。その貢献は地道に、ちょっとずつ知識を積み上げていくという作業を要する。しかし、それは一体どういうことなのか？

こんなんでいいの、っていう少々極端かもしれない例を挙げることで、まずは肩の荷をおろしてもらいたい。科学、学術のそれぞれの分野には方法論というものがある。そしてその分野の、あるいは分野をまたがって著名な巨匠が、とてつもなくすごい方法論を思いついたとする。例えば統計学の分野で、そういうことが起こる。なんとかモデルって奴を誰かが思いついたとする。ただし、その理論が編み出されて日が浅いので実際にどういうふうにならそれが優れていて、どういうふうになら劣っていて、実際に試してみたらどうなのか、ということがまだ分かってないとする。それらの小さい問題を解明していくことも貢献である。実に役に立つ。次のような形で、このコバンザメ的研究は、その分野に貢献するのである。

1. 天才的な学者がなにか理論的なものをあみだす。例 新しい統計学的理論
2. その理論を細かく勉強し、問題点などを解明する。例 その統計方法はどのような状況で大きな問題があるのかなど。しょうしょう、いやみな言い方だが、とりあえずコバンザメ的研究と呼ぶ。理論的研究だけでなく、コンピュータを使ってシミュレーションしたりする。
3. 実際にその統計学手法をしようする応用学者が、その天才の文献だけでなく、コバンザメ的研究をも参考にしつつ、研究をすすめる。

という風に、コバンザメ的研究も、学術におおいに貢献するということが分かる。自分の研究

が後の研究者の研究にリンクされることが、学術的な貢献をするということだ。（ここまで書いて分かったのは、この貢献は、理論的貢献とも実質的社会的貢献とも少々違うようだ。ということは貢献には少なくとも 3 種類あるということか。この 3 つのことを研究計画の最終パラグラフには織り込みたいものだ。）

色々なパターン

1. 総合的なモデルを完成させることによる学術的貢献

ある現象をとらえて、いろんな人がいろんなことを言う。あーだ、こーだ。それらをまとめて検証し、総合的なモデルを完成させる。いろいろある要素のなかで何が重要か、などということが分かる。

3. ある理論を試す

それぞれの分野には、大きな理論というのがある。でも、その理論が証明されているとは限らない。結構、いろんな結果がでていたりする。そこで、自分でデータをいじってみることで、理論に修正をする。

ある理論が、コンテキストによってどう修正されねばならないかを追求する。

理論にたいしては、決め付けなしで、OPEN MIND で望むべきである。仮説がくつがえされることは、かえってよい事である。あたらしい解釈や理論修正が可能となるからである。

1. マクロとミクロをつなげることによる学術的貢献

ミクロというのは身近な現象、マクロというのはもっと大きな空間をさす。今まで聞いた中でこれはすごい説明だと思ったのは、なぜある場所である病気がはやったかというもの。マクロ的には蚊が大発生したから、ある病気が流行ったというミクロレベルでの説明がある。（完全なミクロとは言えんが、まあミクロとしておこう。）ではなぜその蚊が大発生したかという、エルニーニョとかいう暑い空気を伴った天候現象が発生したからだという。さらになんでそれが発生したかという、たしか車や工場から排出されるガスに関係しているという。このように、あるミクロレベルの現象が実はさらに大きいレベルの現象に関係している。このような、小亀のうえに親亀がのっていることを解明する研究を、ここではミクロとマクロをつなげる研究と呼ぶ。

ミクロ現象には、もうよく言われているメカニズムを選ぶ。特に天才的な学者が言っているようなことがいい。例えば、あるノーベル経済学者が、職業的地位は人的資本の量によって説明できるといったとしよう（つまり能力の高いもののがいい職につける）。このメカ

ニズムとマクロの関係を研究するのが、ここで提唱しているアプローチだ。マクロといえば例えば歴史を見てもいい。一見当たり前とされているこのメカニズムは歴史によってどう違ってきているのか、そしてそれは何故か？制作や制度をマクロととらえてもよい。どのような法律をもった社会で、このメカニズムがより顕著に現れるのか？

VIII. 学術の世界の文化資本

最後に、文化資本という概念にふれることに本稿を終わりとする。ここまでは、非常におおざっぱな枠組みを示した。非常に合理的な枠組みであり、また大学院生であれば、だれでも使わなければならない枠組みだから、できていて納得という部分大きい。

ここで紹介するのは、裏の技術である。業界に長くいるから、当然だと思われることはたくさんあるが、大学院生のレベルまでだと、業界の雰囲気や文化に慣れていない。例を示すことで、何を言いたいのかをずばり言ってみる。

私自身、大学院を離れ、評価研究という分野に長くいて初めてわかったことがある。それは大学院で博士論文を書くのにつかったデータ分析というのは、究極的には因果関係を証明できない、、、ということである。因果関係を証明するためには実験がいるが、社会科学研究では実験がしにくい(倫理的な理由で)。

だから、実験でない方法で収集されたデータを使うときは、常に、自分のデータに対して懐疑的、批判的な態度を持っていなければならない。こうだ！と決定ずけて結論を言いたくても、つねに、懐疑的でないといけない。

これは暗黙の作法であるから、

チェックリスト

Guidelines for Writing a Proposal for the National Academy of Education/Spencer Postdoctoral Fellowship http://www.nae.nyu.edu/spencer/spencer_app.pdf の翻訳です。

Below are some of the questions that the Selection Committee uses in their discussions of applications:

- I. Is the application appropriate for this program?
 - a. Is the project a research project, i.e. not curriculum development, not an evaluation, nor an applied project?
 - b. Does the proposal meet the fellowship's goals and purpose?

- II. Does the proposal show an in-depth knowledge of relevant educational research in

the field?

a. Does it review and critique relevant and important previous studies in the area of the proposal's research?

b. If the applicant might profit from access to particular individuals and resources, does the proposal mention who/what they are?

III. Does the proposal specify an appropriate research design and method to collect the data?

a. Is the design and are the methods appropriate to the research question?

b. Will that design allow the researcher to find the answers to the research questions posed?

c. To the extent possible, does the proposal anticipate the shape of possible findings or the results of the inquiry, and indicate what conclusions could be drawn?

IV. Does the proposal specify how the project will contribute to and extend educational knowledge?

a. What relevance does the project have to education?

b. Does the project address an important educational issue?

c. Will the project enhance educational knowledge in a critical way? Does the proposal explain why this knowledge is worth pursuing or how will it benefit education?

V. Can the project be completed within the time-frame the fellowship allows? (One year full-time or two years half-time.)

VI. Is this a well-written proposal?

a. Is the proposal written for a general academic audience and not for specialists in one discipline/research area?

b. Is the organization and structure of the proposal clear? Does it define terms and procedures, etc.?

VII. Does the proposal have a new way of thinking about or fresh approach to a

persistent and important educational problem or issue?

Before submitting your proposal it can be very helpful to get feedback from colleagues you know and respect, people who can provide constructive criticism and who are not your mentor or your immediate collaborator. It may be especially helpful to enlist a colleague whose focus is different from your own to ensure your proposal can be understood by readers from a different disciplinary background.

We also recommend reading “The Art of Writing Proposals, an article published by the Social Science Research Council which is available on their website at <http://www.ssrc.org/artprop.htm>.